2019年11月3日　杜の家せんだい　第6回セミナー＜サマリー＞
テーマ：「子育ての孤立化を防ぐためには」

＊精神科医永嶋弘道先生の挨拶によりセミナーは始まりました。
＊熊谷早希子さん（南光台東校区「地域ぐるみ」健全育成推進協議会会長）
振り返ると私も子育てでは孤立化していて友達もいなくてもいいと思っていたが、子供が公園の友達と遊びたがるので思い切って公園デビューして地域の中に入っていった。長女は幼稚園の時は誰とでも遊ぶ子だったのに、小学校1年生の時に一時的に不登校になったが、PTA のお母さん方に巻き込まれてすぐに不登校をやめた。その頃は地域ぐるみで子育てをするのは当たり前であったが、あえて「地域ぐるみ」での健全育成を掲げる推進協議会の考え方に賛同して参加するようになった。小中の校長や教頭、教務主任や PTA 本部、地区委員などが年4回集まって地域清掃などをしていた。小学校の地域支援本部の仕事も 7 年間しているが主に先生方のサポートをしている。学芸会で子供たちの衣装を作ったり、小学校1年生のクラスで4―6月の間教室の後ろから見守ることもやっている。子育てが終わった地域の人達がやっていて直接の保護者の方々は入らない。今は個人情報の保護の考え方があって、学校の連絡網で他の人の電話番号は分からない。先生が親に連絡できないこともある。私たちの世代と今の世代の親たちの意識が変わってきている。授業参観は夫婦で来るが、懇親会に残る人は 2-3 人ぐらい。子供会に入る人が激減していて、一昨年は 100 人入っていたのが、昨年は 20 人になってしまった。子供会に入っていないと子供たちに運動会やお祭りにも声を掛けることができなくなってしまう。幼稚園から来たお子さんたちと保育園から来たお子さんたちの親の意識が違っていて、幼稚園のお子さんたちの親は積極的に関与してくれるが、保育園のお子さんたちの親ごさんたちは学校に預けっぱなしのようなところがある。今の世代の人達と私たちの世代の人達をつなげる取り組みが必要だと思う。孫だましの会のような感じでおじいさん、おばあさん達を巻き込むことも必要だ。

＊後藤道子さん（南光台東部地区社会福祉協議会会長）
社会福祉協議会の会長と町内会の会長を 27 年間やっている。最初は集会所もないので我が家で近所の人達と話をしていたのがきっかけで、夫が最初に町内会を作ることになった。団地なので地域のつがなりを作ることが重要。子供が 4 人いて PTA の会長も 17 年間やっている。子育ての孤立化は親の孤立化なのだと思う。女性の社会進出に伴って親のつながりがなくなってしまった。幼稚園や保育園などの保護者の会の役員をすることなどを通して親同士のつながりができるが、役員のなり手がいない。つながりができると生の声が聴けるのがいい。色々と偉い先生の話を聞いて勉強することもあるが、現場の現状に合った話は生の声を聞かないと分からない。子育ては親育てと言う話があったが 4 人の子供たちのおかげで親として育ててもらった。子供たちの健全育成と言うが健全と言う言葉の意味は心身が正常に機能して健康である様とある。まず親が健全でなければ子供も健全に育てることはできないのではないか。地域の役員になってくれる人がいない。子供会はいらないと言って入らない人が多い。これからど

うなるのか心配している。昔は子供が生まれると子供会に入るのが１つの仕事だった。PTA や町内会も同じ。活動や人とのつながりを通して勉強したり、学んだりすることが多い。女性が変わると社会が変わるとある先生に言われたが同じように親が変われば子供が変わると思う。母親は家庭の太陽であるべき。女性が社会進出すればするほど子供の気持ちはどうなってしまうのか。早朝保育や延長保育などの制度は充実してきたが子供は家に帰って寝るだけになってしまっている。親ではなくて学校や地域が子供を育てるような意識を持っている人があって、何かあると学校のせい、地域のせいにしたりする。そうではなくて家庭が子育ての基本だろうと思う。そのことを子を持つ親は考えるべき。内閣府の調査では 40-60 代の人は 60.3 万人いて、その内 14 万人が引きこもりになっているそうです。これは大変な問題。先日、子供が引きこもったので仕事をやめて家庭に入ったが子供は治らず、その内自分も引きこもるようになってしまったとう話があったが、子供が引きこもってしまってからでは遅いのではないか。専業主婦にとっては PTA 活動が唯一の社会参加。参加することに意義がある。皆さんから吸収する多くのことがある。7 人家族で孫も一緒にいるが、息子は洗濯たたみやゴミ出しなどやってくれる。男女共同参画社会と言うが要するにそれぞれが優しい気持ちを持つことが重要なのだと思う。

＊千葉富美子（元小学校養護教諭）

塩釜で生まれて塩釜で育った。養護教諭として保健室の先生としてやってきて、5 年前に退職した。それが終わってから 4 年間町内会の会長の仕事をしてきた。子供は 4 人いて皆成人したが、自分の子育ての経験や養護教諭としての経管から話をしたい。学校を辞めてから子育てサポーター養成講座に参加して、リーダーの資格も取った。中学校で支援員の仕事を 2 年、スクールサポーターの仕事を 2 年やった。学校の先生方のサポートで印刷業務や雑用、養護教諭の仕事の手伝いなどをやった。不登校や崩壊家庭が沢山あるのでそういう対応や遅刻児童の対応などもある。保健室とは別にサポート室と言うのがあって、教室に入れない子供たちの居場所作りをしている。支援室の先生は 1-2 人いる。発達の課題や不登校など様々な課題を持つ子供に対応している。支援員がもっと増えないと先生が大変だと思う。全く学校に来ない子供がいて、お母さんは毎日学校に電話をしてきて、今日も行けないと言う話を一方的にする。よくよく話を聞くと、幼稚園の頃から集団生活ができていないと言う。保健師やスクールソーシャルワーカーが関わっていて色々な相談の場所などを紹介するが全てドタキャンになってしまう。お母さん自体が病的なのではないかと思う。子供が学校に行く権利を親が邪魔している、ネグレクトのようなケース。しかし医療につながるのも難しい。

　未就学児は保健センターでフォローしてくれるが、就学すると子育て支援課に移行して、行政の縦割り制度のためにその間の引継ぎが切れてしまう。児童相談所も他県から移って来た時にスムーズに情報がつながらない。町内会では 65 歳以上の人は地域包括支援センターに行けばどんな内容でもつなげてくれるし、家にも訪問してくれる。子供たちも複合的な問題を抱えているので、窓口が１つになれば良いと思う。緊急性があってもそれぞれの機関で捉え方に温度差がある。

地域で 80 歳ぐらいのおばあさんがいて 1 人で住んでいた。被害妄想があって真正面の家から異様な音がすると言ったり、物を投げられたりすると言って、ご近所とトラブルになっていた。それで民生委員や町内会長にも苦情があげられていた。そのおばあさんからも電話があって否定的なことをこちらが言うとガチャンと電話を切られてしまった。病的だと分かってきて、電話が来たら地域包括支援センターにつなげるようにした。パトカーを 1 日 2 回も呼ぶこともあった。保健師につなげて、長寿課や保健師、地域包括、町内会長、民生委員、その人のお姉さんも交えたケース会議を行い、やっと事態が動いて、医療につなげることになって、今はその人は入院となった。

学校から専門機関につなげるのが難しくても、ケース会議を時間を置かずにできたら動きが出てくるのかも知れない。学校は子供だけではなく親を育てないといけない。クレーマー対策やいじめの問題、家庭崩壊などがあって学校の先生が学習に集中できない状況。地域での専門職や地域とのつながりの中でうまく回していかないといけない。行政と地域が学校とうまくつながらないと先生が病んでしまう。朝学校に来ると涙をポロポロ流す先生もいて、スクールカウンセラーの先生に相談したりしている。

＊菊地崇良（たかよし）さん（仙台市議会議員）

自分も子育てをしている親としての悩みを抱える立場で、また仙台市でいじめと自死の問題があって設立された「仙台市いじめ問題等対策調査特別委員会」の理事として携わってきた立場から話をしたい。仙台市では 3 人の子供が自殺して、小学校のお母さんがノイローゼになって子供と心中した事件もあった。人は複合的な要因があって逃げ場がなくなって死にいたる。逃げ場がなくなった方を救うために、子ども・子育て版地域包括支援センターのようなものがあればいいと本当に思う。私は 43 年生まれの 51 歳。私を含む世代以下の子育て力が下がっているのではないかと自らを省みながら感じる。戦後、自由と権利ばかりが横行して家庭が持つ子育ての責任や社会で後輩の子育てを指導する力が低下してきた。核家族化が進んだことも影響している。プライバシーの保護などがあってこれらに対し非常に抑制的な状況となっている。心の豊かさよりも、モノに対する欲が優先されていることなども根幹的な原因の 1 つだ。また、戦後、教育は独立した機関となり首長や議員がモノを言えない状況が続き、教育の現場には独特の文化ができあがったとも言われている。仙台市の条例では、学校のいじめの早期発見と地域の見守り体制を作るようにした。特に地域の協力について記載したのは、親がどういう風に子育てをしたらいいか分からないので、地域のふれあいの中で親を助け、育てるなど、子供だけではく大人を感化することが必要だという思いがあったから。

東日本大震災は我々に人のつながりの大切さを教えてくれた。隣の人達と顔の見える関係ができている社会は幸せな社会だろう。お祭りや防災訓練ができている町内は良い町内だと思う。子育て世代は地域活動に参加しにくいので、学校と地域が連携して授業参観と防災訓練を一緒にした。自分の子供の安全のためには普段も災害時も地域の見守りが大事だと気づいてもらう。防災訓練を通じて地域の顔の見える関係ができ、大人が社会の一員としての責務を果たす必要性について再認識しあう。その中で子供たちにも役割を与えて褒めてあげたら、問題の

あった学校が健全育成校になって、成績も上がった。成果がでるまで数年かかったが、こういうような取り組みを各地で共有できればと考える。

道徳科目も教科化され、20 年後には立派な大人ができるかも知れないが、それまでの間は、先ほども述べたような社会のふれあいと支え合いで子供たちを守り育んでいければと思う。学校地域支援などで地域の人に学校を支えてもらい、教職員の負担軽減を図りつつ、新たな風を送ることも必要だ。

＊懇親会

懇親会では男性の立場からの発言やカウンセラーの立場からの発言、不登校の子供をもつ親の立場からの発言など様々な意見がありました。

キーワードとしては「子ども版の地域包括支援センター」「地域を巻き込む仕掛けとしてのお祭りや防災訓練」「行政の視点とは別の一対一の関係の相互支援」「地域のおける顔の見える関係づくり」「本音で付き合える関係づくり」などが挙げられます。